

歌川派絵師の描いた外眼部の特徴について

田中 孝男¹⁾, 高橋 雅夫²⁾¹⁾エビスクリニック眼科, ²⁾ビューティサイエンス学会

【目的】 歌川派の浮世絵の絵師たちが描いた外眼部描写に関して、解剖学的に特徴を検討したので報告する。

【対象と方法】 各時代を担った歌川派の代表的三画家（初代歌川豊国、歌川・一勇斎国芳、月岡芳年）が描いた美人画（無作為抽出した豊国作10点、国芳作11点、芳年作10点）を対象に、外眼部をスキャナで取り込み、左右の瞼幅、角膜横径、瞼裂幅等を測定した。角膜径（角膜横径/瞼幅×100%）、瞳孔比（瞳孔径/角膜横径×100%）、眼瞼拳上度（水平線に対する角度）の平均値を求め、作者別にみた違いを統計学的に検討した。

【結果】 瞼幅に対する角膜径の比をみると右眼は豊国44%、国芳で35%、芳年48%、豊国と国芳、国芳と芳年の間に有意差（ $p=0.008, 0.003$ ）を認めた。左眼は豊国41%、国芳38%、芳年が39%で、国芳は他の二人に比較して左右とも角膜（黒目）を小さめに描いていた。

角膜径に対する瞳孔径の比率では、国芳の右瞳孔径の平均は47%、芳年45%、左眼は国芳48%、芳年45%で、統計学的に作者別の有意差はなかったものの、国芳の標準偏差値が±10であるのに対して、芳年の場合±14と径を、テーマに併せて大小様々な大きさに描いていたことが解った。豊国は10作品中1作品に瞳孔を描写（瞳孔径比58%）したに過ぎず、表現に乏しかった。

拳上度では、豊国の場合、左右で等しく平均約30度、国芳も左右等しく約20度で豊国よりも10度ほど水平に近い。さらに芳年の場合、左16度、右18度と豊国や国芳よりも、角度は水平に近づいた。豊国と国芳、豊国と芳年の間には有意差（ $p<0.0001, p<0.001$ ）がみられた。

【結論】 豊国と芳年は角膜を大きめに描いたが、国芳は幾分小さく描き、同じ歌川派でも角膜の大きさに関しては、作者別に作風の違いがあった。瞳孔径に関しては、国芳から芳年の時代に移り変わるとともに、径の直径を自在に変えて描写し情動を豊かに表現したのが解った。同時に世代の推移に伴って、眼瞼の拳上度も水平に近づき、写実的描写（成人女性の拳上度10度）を求めたと考えられた。